
Flashback

シータ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Flashback

【Nコード】

N1599F

【作者名】

シータ

【あらすじ】

駅前の喫茶店で恋人たちが別れて、その後男はどういう行動を取るのか…読んでみてください。

特に何をするワケでもなく、公園のベンチに座り込んでいた。遠くで子供たちのはしゃぐ声が聞こえた。

「楓太、将来絶対結婚しようね！約束だよ？」

「あたしたちに子供ができれば、どんな子供になるんだろうなー」

「楓太？何ぼーっとしてんの？もしかして…あたしに見とれてたとか？まさかねえー」

……今日でもう三回目だ。ふと気がつくともみのりのことを考えていた。僕はみのりを守ってやれる自信がなかった。だから僕は、みのりから離れることにした。

「ねえ、どうして？自信なんてこれからついていくよ…なんで『別れよう』なんて言うの？ねえ…ねえ楓太？」

「ごめん…」

「謝っていたらわかんないよ…理由を教えて？」

「ごめん…」

「謝らないでよー!!」

「ごめん…」

しばらくの沈黙の後、店中にいい紅茶の香りが漂った。僕らが入ったこの店は僕らが付き合う前から通っていた店だった。駅前の人通りの多いところにあるくせにあまり人がいない。だからいつも客は僕らだけだった。

「ミルクティーでございます」

「どうも」

いつもよりミルクティーは甘かった。なのに、どうしてだか苦くて切ない味がした。

「…ねえ、このあと遊園地行こうか？あたし観覧車乗りたい！」

「えっ…？」

「いいじゃん、あたしの…最後のわがまま…聞いてよ」

「…わかった、行こう、遊園地。観覧車も乗ろう」

「本当に…？」

「ああ」

「やった…ありがとう…！」

遊園地へ着いたものの、いつものような賑やかさはまるでなかった。平日の八時だったからだろうか。僕らを生温い風が包んだ。遊園地は夢の世界なのに、現実引き戻された気がした。

マダスキナノ二ネ…そんな声が聞こえた気がした。そうだ、僕は彼女にウソをついていた。僕は彼女に未練たらたらで本当は別れたくない、誰にも渡したくないのにウソをついてしまった。

でも、もう戻ることはないのだろうと心のどっかで諦めてしまっていた。

「観覧車、乗ろうか…ほら、結構空いてるよ」

「そうだな。平日だからじゃないのか？」

「ほら！早く乗ろう」

「ちよっ…もうーお前は変わらないな…子供みたいだよ」

「ちよっとそれ、こういうことーもう大人だよ、あたしー」

「はいはい、乗ろう」

観覧車は人が二・三人しかいなくて、すぐに順番が回って来た。外に見える街の景色はどこもかしこもキラキラしていて、どんよりしていたのは僕らだけのようだった。

「……」

「……」
「ねえ…なんか言って」
「……」
「なんか言ってよ」
「……」
「なんか…言って…」
僕は何も言うことが出来ず、みのりの肩に手を置いた。いつもの、みのりの肩なのに、とてつもなく遠い存在に思えた。悲しみに耐えられずみのりの肩から手を離れた。
「ははは…すっごい夜景綺麗だねえ…」
「…そう…だな」

こうして僕らは終わりを迎えた。

相変わらず僕はベンチから立ち上がれずにいた。心…いや、身体がズシン、と痛む。…まだ…間に合うだろうか？

僕はケータイに入っている、まだ消せずにいる彼女の番号を探した。

プルル…プルル…この呼び出し音が僕には永久に思えるほど長く感じる。彼女は出てくれるのだろうか、それとももう僕のことなど忘れて…そんな物思いにふけていた時間は不意に途切れた。
『……もしもし？』彼女の声だ…さっぱりとしていて、でも甘く

色香が香る、僕の好きな声。

「あ…もしもし」

『もしかして楓太？』

「うん」

『あはは…元気だった？』

「うん、そっちは？」

『元気だよ』

「……」

『……』

「『……あ、あのさっ』」

「…何？」

『そっちこそ』

「あのさ…彼氏出来た？」

『あはは…何それーちよつと失礼じゃないのー？そっちこそ彼女出来た？』

「…僕がそんなにモテるように見える？」

『あははっ』

「なんだよ、その笑いはー」

『変わらないねえ、本当楓太は変わらない』

「…なあ、久しぶりに話さないか？あの店で」

『…うん、いいよ』

「じゃ、また後で」

十六時、三十分。

ちよつと…早過ぎただろうか？でも昔から僕はせつかちだった。そのせいで友達や彼女を急かしてしまっていた。

「…はあっ…はあっ、ごめん…ちょっと…とのんびり…しちゃって…」

「いいよ、全然…僕のほうこそごめんな…みのりに無理させちゃまって…」

「…はあっ、ところで話って何なの？」

「あのさ…」

そんな言葉を繋ぎながら、僕の手は落ち着きなく尻ポケットをいじくっていた。彼女に伝えたいことがあって、それを伝え終えたら渡そうと思っているものがそこには入っていた。

「ん？どうした？楓太？」

「あのさ、みのり…僕は自分勝手にわがままな人間だよ。そんな僕の話聞いてほしいんだ」

「うん」

「僕は…僕は散々勝手なことを言った。でも…やっぱりみのりをほかの人に渡したくないよ」

「うん…」

「僕のことを許してもらえらなら、僕と一緒にいてくれるなら、これを貰ってください」

「えっ…」

そこには、キラキラと夢へと誘ってくれるような輝きの指輪が楓太の手の中に収まっていた。

「……っ」

「みのり？」

「もう…っ、早く言ってよね…バカ…」

「…ごめんな」

「うれしい…」

「手、貸してみ」

「うんっ」

その指輪はまるでみのりの指にはめるために作られたかのようにぴたりだった。デザインもあまり派手ではなかったが、さりげない

存在感があった。

「ミルクティーでございます」

「ありがとうございます！……あっ」

「……ぶっ、あはは！！」

こんな時間がずっと続けばいいと思った。彼女とだったら、
みのりとだったら続く気がした。いや、きっと続くだろう。彼女と
いるこの時間がかけがえのないくらい大切な時間なのだから。

End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1599f/>

Flashback

2011年1月6日14時20分発行